

ESP と文学的教材

「ビジネス英語」で使う文学の映画

久世 恭子

1. はじめに

文学は言語教育の教材として再評価されて以来、言語能力の向上、感情移入や人格形成、文化理解などの点から重要な役割を果たすことが主張されてきたが、日本の大学英語授業で文学を使うことができるコンテキストは限られている。その主な理由として、文学テキストは inauthentic な教材と誤解され文法訳読法と結び付けられている (Saito, 2020)、実用的なコミュニケーションに役立たない、学生の専攻や将来の職業に関係する「特定の目的のための英語」English for specific purposes (ESP)と接点がないなどが挙げられている。

本発表では、これらのうち、ESP を重視した授業での文学的教材の使用に注目し、文学教材の特徴を活かしながら使うことはできないのか、具体的な授業事例を示しながら議論する。研究対象とするのは、経営学部 2 年生の選択必修である「ビジネス英語」の授業でカズオ・イシグロの小説 *The Remains of the Day* に基づいた同名の映画を用いた事例である。最初に実践方法を紹介した後で、活動や課題に対する学習者の解答とアンケート調査に現れる反応を分析し、ESP の授業で文学的教材を使う可能性について論じる。

なお、本発表では、1980 年以降に英国で起こった言語教育における文学の議論の流れを汲み、文学の意味を広義に捉えて文学をもとに製作されたアダプテーションとしての映画を「文学的教材」と見なすこととする。

2. 英語教育における ESP と文学

Hirvela (1990)は、ESP における文学教材の位置を追究し、“The terms literature and ESP are mutually exclusive.” (p. 237)と述べた。ESP は、伝統的に英語学習の目的であった文学に取って代わる形で発展してきたからである。1980 年代になると、Hutchinson & Waters (1987)に見られるように、ESP は特別な言語や教授法を指すのではなく、従って教材も特別なものに限定されるものではないとする考えも紹介された。中でも、Widdowson (1983)は、ESP をバリエーションのあるものと捉える可能性を紹介し¹⁾、“The purposes of ESP are arranged along a scale of specificity with training at one end and education at the other.” (p. 10)と説明した。このように ESP の目的をトレーニングから教育まで幅のあるものと見なす時、文学教材にも果たす役割があると考えるもある (Hirvela, 1990)。実際に、これまで ESP の授業で文学教材の使用を研究したものとして、エンジニアリング専攻の学生に小説を用いたケース (Kelly & Krishnan, 1995) や医薬系の学生に病気に関する小説・映画を用いた例 (久世, 2018) などがある。ビジネス分野でも、国際経済学科のゼミでリーダーシップについて学ぶため 8 編の小説や戯曲を用いた事例²⁾ (Igawa, 2020) があるが、数は限られている。これらの背景を踏まえ、本発表では 2 つの研究課題を設定する。

- 1) ESP の一形態である「ビジネス英語」の授業の中で、文学的教材をその特徴を活かしながらどのように使うことができるか
- 2) 学習者は、「ビジネス英語」の授業における文学の映画や言語活動にどう反応するか

3. 文学の映画を使う「ビジネス英語」の授業

(1) 授業の概要

本発表では、首都圏にある大学の経営学部で発表者が 2020 年度後期に担当した選択必修の「ビジネス英語 II」の授業を研究対象とした。受講生は全員 2 年生で 2 クラス合計 75 名、英語能力は TOEIC (L&R)スコア 350-800 点である。「ビジネス英語 II」では様々なテーマや教材を使った授業が開講され、本授業の教材が映画であることは予め指定されていた。

The Remains of the Day は、Darlington Hall で働く執事 Stevens を中心とした小説であるが、発表者は、執事 Stevens とその職場にはビジネスに関連するテーマを見出すことができると考え、Sato (2018)を参考に、映画 *The Remains of the Day* からビジネスに関連する 11 の場面を選び、movie clip を作成しそれに対応するワークシートを用意した。テーマの例は、Job interview, Dinner with colleagues, Reporting a problem などである。ワークシートに基づいた活動は 3 つのパートに分かれる。まず、テーマに関連する内容を pair/group で discussion する pre-viewing activities、次に movie clip を視聴しながらワークシートのスキットの空所を埋め、答え合わせをして意味を確認した後で role play をする movie watching、最後に comprehension questions と discussion を行う post-viewing activities である。授業はすべて Zoom を使った非対面で行われ、教材の配布や課題の回収

は大学の learning management system (LMS)を使用した。教室授業は英語と日本語の両方が用いられた。

(2) 文学的教材の特徴を活かした活動

文学的教材を使うからには、その特徴を活かした使い方が望まれる³⁾。本実践では、通常の言語活動の他に、comprehension questions に解釈を伴う答えが複数ある問題取り入れることと、創造的なライティングを経験させることにより、文学的教材の特徴を活かした授業を計画した。

前者の、解釈を伴う答えが複数ある問題は、literal questions と区別して interpretive questions と言われるもので、Kim (2004)では、“Readers sometimes went beyond the literal meaning of the text to look for a deeper, hidden meaning.” (p.155)と説明されている。答えが1つだけではない問題に取り組むことで学習者は他者の見解を知り多様な考え方を学ぶことができ、その結果、曖昧さに対する耐性を身に付けることができ、これは文学教材使用の特徴の1つと見なされている(e.g. Hall, 2005)。

後者の創造的なライティングは、主人公の Stevens になったつもりで、Mrs. Benn と 20 年ぶりに会った日の夜に現在の雇用主である Mr. Lewis に手紙を書くというものである。この“rewriting from different angles and positions” (Carter 2010, p.118)も文学教材を使用した外国語学習でよく行われる活動で、Carter (2010)が“textual transformations”として概念化したものである。

4. 学習者の反応

本稿では、学習者の反応の探るために、課題に対する解答の分析を省略し、LMS を用いて学期末に行ったアンケート調査の結果をもとに議論する。アンケートの回答数は2クラス合わせて70である。

表1は、「ビジネス英語の授業でこのような映画を教材として使うことについてどう思いますか。」という質問に対しての回答をまとめたものである。回答者の半数以上が「良いと思う」と答え、「まあ良いと思う」と併せると肯定的な回答が9割を超えた。

表1 ビジネス英語の授業でこのような映画を教材とすることについて (n=70)

良いと思う	まあ良いと思う	どちらとも 言えない	余り 良いとは思わない	良いとは思わない
37 (52.9%)	26 (37.1%)	5 (7.1%)	1 (1.4%)	1 (1.4%)

次に、「ビジネス英語の教材としてこの映画の良い点はどのようなところですか。」という質問の答えを選択しから選んで回答してもらった。表2が示すように、半数以上の受講生がこの映画の良い点として「英語圏の文化が学べる」「日常会話を学べる」「楽しんで学べる」と回答し、次いで「ビジネス英語に関する表現が学べる」を良い点とした回答も多かった。

表2 ビジネス英語の教材としてこの映画の良い点 (複数選択可)

英語圏の文化が学べる	43	教養が身につく	24
日常会話を学べる	41	総合的な英語力が身につく	17
楽しんで学べる	39	ビジネスに関する概念や姿勢が学べる	13
ビジネス英語に関する表現が学べる	32	コミュニケーション能力向上に役立つ	10

授業の感想を書いた自由記述のうち、代表的なものとして以下のような回答がある。

映画をみることで本場の英語と、その国の文化を楽しみながら学べて楽しかったです。またこのような授業があればぜひ受けたいと思います。映画内で話される英語はかなり難しいと感じましたが、先生の解説と、字幕を見ればストーリーは容易に理解することができて楽しめました。教養に役立つ、他のおすすめの洋画も教えて頂ければ嬉しいです。

自由記述の内容をコード化して分析すると、2回答以上の指摘があったものは「映画自体が興味深いものだった」(6)「リスニングが難しかった」(6)「映画を使って英語を勉強することが楽しかった」(3)「内容が難しかった」(3)「生きた映画に触れられた」(2)「表現や言い回しを学んだ」(2)「洋画を見るきっかけとなった」

(2)「もう少しなじみのある教材の方がいい」(2)であった。

5. 考察とまとめ

本発表では、ESPの1つである「ビジネス英語」の授業において、文学をもとにした映画を教材として用いる実践例を示した。英語教育においてESPと文学は接点がないと考えられてきたが、ビジネス英語と教材の間に関連性を見出し、答えが複数ある解釈が必要な問題や創造的な活動への取り組みを含めることで文学の特徴を活かしながら文学的教材を使用する事例を提示した。

受講生へのアンケート調査では9割以上がビジネス英語の授業でこのような映画を教材として行うことについて肯定的な回答を示した。どのような点で良いかという問いに対しては、「英語圏の文化を学べる」「(日常)会話を学べる」「楽しんで英語が学べる」「ビジネス英語に関係する表現が学べる」と回答した。一方で、リスニングが難しかったという感想も多く、やはり、authenticな教材では学習者の英語能力レベルに合わせた作品を選ぶのは難しいと言える。少数ではあるが、映画についてももう少し身近な題材のものの方がいいという意見もあった。

文学的教材を使つての学習と英語力向上との関係は明らかにできなかったが、この授業により英語圏の歴史や文化を同時に学ぶことで幅広い教養が身に付き、また、映画の内容が興味深いという回答が多かった。学習へのモチベーションを高めることができたと考えられる。本来ならば、たとえ一部でも原作を読み、ノーベル文学賞受賞作家の文体と「信頼できない語り手」を特徴とするこの作品の魅力も味わってほしいところであるが、様々な事情から今回は映画のみ使用した。それでも受講生にとってこの作品に触れられた意味は大きいと考えている。

本発表で強調したいことは、適切に作品を選び使い方を工夫すれば、「ビジネス英語」のようなESPの授業でも文学的な教材を使える可能性があるということである。文学的教材は、その利用の機会が限られているからこそ、授業の一部で使用したりESP重視の授業に取り入れたりするなど多様なコンテキストでの使用が模索されるべきである。

註

- 1) Widdowson (1983)は conformity/creativity, goal-oriented/process-oriented teaching, competence/capacity, narrow-angle/wide-angle course design の4つの観点をを用いた。
- 2) この授業は、Harvard Business School のコースを応用してデザインしたものである。
- 3) Carter & Long (1991)は、教育的文体論を応用した language-based approaches を提案したが、“It is initially important that language-based approaches should service literary goals.”(p. 8)と述べている。

参考文献

- Carter, R. (2010). Issues in pedagogical stylistics: A coda. *Language and literature* 19 (1): 115-121.
- Carter, R & Long, M. N. (1991). *Teaching literature*. Harlow: Longman.
- Hall, G. (2005). *Literature in language education*. New York: Palgrave Macmillan.
- Hirvela, A. (1990). ESP and literature: A reassessment. *English for Specific Purposes*. 9: 237-252.
- Hutchinson, T. & Waters, A. (1987). *English for specific purposes*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Igawa, J. (2020). Borrowing books from Harvard: An initial evaluation of the adaptation of a Harvard Business School Course for undergraduate international business majors in a Japanese university. 『明治学院大学経済研究』第160号: 91-104.
- Kelly, R. K. & Krishnan, L. A. (1995). “Fiction talk” in the ESP classroom. *English for Specific Purposes*. 14 (1): 77-86.
- Kim, M. (2004). Literature discussion in adult L2 learning. *Language and education*. Vol. 18, No. 2: 145-166.
- 久世恭子 (2018). 「ESPと文学テキスト: 英語教育における接点を探して」 *JAILA Journal* (4): 2-13.
- Kuze, K. (2020). An examination of the role of authentic materials in university business English courses. 『経営論集』 96: 41-51.
- Saito, Y. (2020). Pedagogical stylistics as a discipline for bridging the gap between literary studies and English language teaching in Japan. *Studies in English literature (Regional branches combined issue)*. Vol.12. 129-138.
- Sato, Y. (2019). Exploring the possibility of using authentic English materials in requisite English classes in the Faculty of Business Administration. 『経営論集』 93: 139-150.
- Widdowson, H. G. (1983). *Learning purpose and language use*. Oxford: Oxford University Press.